
ホントの優しさ

萩原愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホントの優しさ

【Zコード】

Z0524A

【作者名】

萩原愛

【あらすじ】

まだ幼かった蘭は大好きだった、小鳥の「ピーちゃん」をなくしてしまった。どうしても『死』というモノが理解できない蘭に新しい・・・そして蘭は・・・。

「ひっく・・・ひっく・・・」

「おい、蘭・・・もう泣くなよ?」

泣きじやぐるわたしに困ったように声を掛ける新一。

「だつてえ・・・」

でも泣きやむことが出来ない私・・・。

今から数時間前、大好きだった小鳥の『ピーチちゃん』が死んじゃった。

ずっとずっと・・・可愛がってた・・・大好きなピーチちゃん。

どうして死んじゃったのか分からなくて。

あのときの私には『死』というモノが理解できなくて・・・。

どうして死んじゃったら戻つてこないの?

ピーチちゃんは、いつもみたいに元気に鳴いてくれないの?

「・・・どうして・・・死んじゃつたら戻つてこないの? あんなに幸せそうな顔してるんだよ?」

死んじゃつたなんて嘘だよね・・・?」

ねえ、新一・・・ピーチちゃんはただ眠つてるだけだよね?

私の元に戻つてくれるよね? またピートで元気良く鳴いてくれるよね?」

新一にこの問いかけでも返事は歸つてこない。

「ね・・・新一・・・ピーチちゃん、戻つてくれれるよね?」

田に溢れるほどの涙を溜めて、わたしは新一に訴えた。

もしかすると、このときわたしには分かっていたのかも知れない。
死んでしまったモノは戻つてこないということを。

でもどうしても信じられなくて・・・新一がいつもみたいに「ああ」
つて言つてくれたら

ピーチちゃんが戻つてきてくれるような気がして・・・だから新一に
同意を求めてたんだ。

わたしはずつと新一を見つめてた。

でも新一は私と田も合わせず、何も口にしない。

部屋は本当に静かで、「静寂」という言葉がピッタリだった。

・・・聞こえるとすれば規則正しく鳴り響く、時計の針の音くらい。
「力チ、力チ」とゆっくりゆっくり、わたしの耳に届き、どじろく・
・・。

いつもより針の音が遅いように聞こえるのは、わたしの氣のせいな
のかな・・・?

しばらくしてその静寂をかき消すように新一は二つ言つた。
「死んでしまったモノは戻つてこない」
「でもそれが何であれひと、人の心の中で生き続けるから・・・消

「死んでしまったモノは戻つてこない」
「・・・」

「でもそれが何であれひと、人の心の中で生き続けるから・・・消

えてしおり」とは絶対無いから」

「・・・・・・・

「ピ一ちゃんは蘭の中で歌い続けるから・・・歌うのをやめてしま
う」とは決してないから」

「・・・しんいち・・・

「だから・・・な?泣くなよ・・・?オメーが泣いてたらピ一ちゃ
んだつて絶対悲しいぜ?」

そう言つた新一の顔、今でも忘れない。

無理に作った笑顔。

いつもの笑顔とは全然違う、今にも崩れてしまいそうな悲しい笑顔。
本当に今にも泣いてしまいそうで、涙が溢れてきやうで・・・でも
新一は泣かなかつたんだ。

自分が泣こちやつたらピ一ちゃんが悲しむから・・・・・・かな。

新一は最初からちゃんと分かつてたんだ。

『死』とは生きしていく上で必ず直面する事実だと「う」と。
そしてそれをちゃんと受け入れなきゃならないと「う」と。
悲しいのは自分だけじゃないことを。死んじやつたモノ自身も
きつと悲しいんだよね。

自分のせいで泣いている人を見ることが辛いんだよね。

私だつたら絶えられなくて悲しくて、泣こちやうかも知れない。

そんな感じをさせちやつて「めんね、ピ一ちゃん・・・本当に
「メンね

そして新一、ありがとう・・・。

あなたの御陰でホントの優しさがなんなのか、分かつた気がするよ。

本当に本当に・・・ありがとうございます

「ふわああ・・・あれ?わたし、寝ちゃったの?」
机の上には広げたままになつてる読みかけの本。
そしてわたしの肩には淡雪色の肩掛け。
わたしはその肩掛けを見て、少し微笑んだ。

(コナン君が掛けてくれたのかな・・・)
わたしはそう思いながら、もう一度目を閉じてみる。

すると悲しいけどどこか温かい、セピア色の思い出がわたしの中で
鮮やかに色付き始めた。

あのとき感じた、人の・・・あなたのホントの優しさ。
大切なモノがいなくなつて、冷たくなつてた私の心を温めてくれた
あなたの言葉。

だから私も。優しさを忘れずに。
あなたが言つてくれたことを胸に。
いつまでも待ち続けるから。

涙を流してしまつこともあるかも知れないけど。

できるだけ泣かないように頑張るから。

あなたを心配させないよう頑張るから。

だから絶対生きて帰ってきてね。

それまでずっと。

やべ、すりすりすり……。

待ってるからね

(後書き)

あとがき

皆様こんにちばへへお久しぶりです、萩原愛です！

ここまで読んでください、ありがとうございましたへへ

私が頑張っていけるのも、全て皆様のおかげです・・・・・！

本当にありがとうございますへへ

そして今回は初めて（チジ）新蘭小説を書かせて頂きました。
新一君と蘭ちゃんの一見ほのぼのな様で、でも切なさを隠している
関係が、

素敵だと思つて・・・書かせて頂いたのですが・・・何と言つてい
いのやらという感じですねへへ；

未熟者で話の所に矛盾しているところが多くありますが、これから
も頑張っていきますので、
どうぞよろしくお願ひ致しますへへ；

連載させて頂いております、「a smile smiling face
a smile」はもうすぐ投稿させて頂きたいと思います
へへ・龜ペース申し訳ありません；

それではこの辺でへへ本当にありがとうございますへへ
失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524a/>

ホントの優しさ

2011年1月7日17時48分発行